| ちひろ美術館の4年 | 1977~2017 | years of Chihiro Art Museum



平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、
そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます。
今の世の中、いろんなものが失われていってるでしょう。
とても素朴なんだけれどたいせつなもの、
それが絵本の中にはあるんです。(いわさきちひろ 1972年)

Contents

目次

- 12 ゲストブックより
- 14 来館者感想ノートより
- 16 ちひろ美術館 40年のあゆみ
- 28 ちひろ美術館 建物の変遷
- 30 展示・企画展 40年のあゆみ
- 45 **Collection** ちひろ美術館コレクション
- 46 いわさきちひろ
- 48 いわさきちひろの生涯
- 50 日本の絵本画家
- 55 海外の絵本画家
- 59 絵本とイラストレーションの歴史資料
- 60 収蔵作家一覧
- 62 Photo Album ちひろ美術館と絵本画家たち
- 62 教育普及活動
- 64 国際交流事業
- 70 いわさきちひろ ブックリスト
- 80 あとがき (公財)いわさきちひろ記念事業団事務局長、 安曇野ちひろ美術館副館長 竹泊祐子
- 80 2016年度 ちひろ美術館評議員・理事・監事

- 4 早わかり! ちひろ美術館の40年
- 6 感謝をこめて (公財)いわさきちひろ記念事業団理事長 山田洋次
- 7 ちひろさんの心を大切に 5ひろ美術館(東京・安曇野)館長、ユニセフ親善大使 黒柳徹子
- 8 ちひろ美術館の使命 開館40年にあたって ちひろ美術館常任顧問 松本猛
- 9 サンドイッチの味と絵描きの命 (公財)いわさきちひろ記念事業団評議員 松本善明
- 10 ちひろ美術館 40 年によせて 作家 中島京子

人間が自然体になれる、ちひろの絵 平塚市美術館館長 草薙奈津子

11 「物語」が失われてもライター・エディター、永青文庫副館長 橋本麻里

『窓ぎわのトットちゃん』タイ語版から33年 翻訳家・通訳 プッサディー・ナワウィチット





1981 『窓ぎわのトットちゃん』 (講談社) 刊行

1983 いわさきちひろ絵本美術館新館オープン

できました

1986

企画展「木にとまりたかった木のはなし」原画展開催

1987

開館10周年!

∖早わかり!/

ちひろ美術館の



画家による約2万7,200点を所蔵

1994 ちひろ展 100 回記念 「ちひろの花ことば」展開催

海外の 美術館での最初の ちひろ展!

1995 第2代館長に黒柳徹子就任

1996 **国ノーマン・ロックウェル美術館にて、ちひろ展開催

ひろ美術館開館20周年、安曇野ちひろ美術館オープン いわさきちひろ絵本美術館 (東京) の呼称を 「ちひろ美術館・東京」に変更







2000

開館 25周年! 2001

安曇野ちひろ美術館新館オープン

2002 安曇野館にて、夏休みの中学生ボランティアの受け入れスタート ちひろ美術館・東京リニューアル・オープン

2004 「いわさきちひろ没後30年 わたしが選んだちひろ展」 開催



40 years of Chihiro Art Museum



子どもたちの "居場所" となる美術館に

2005 東京・安曇野両館にて、高校生以下の入館料を無料に

2007 東京館が30周年、安曇野館が10周年を迎える

2016 安曇野館に子どものための展示室「トットちゃんの部屋」オープン安曇野ちひろ公園内に、 「トットちゃん広場」が完成

「電車の教室」 も再現!

2017 東京館が 40 周年、安曇野館 20 周年を迎える

2018 いわさきちひろ生誕 100 年 メモリアルイヤー!

ちひろの誕生日は 1918年 12月15日です



感謝をこめて

(公財) いわさきちひろ記念事業団理事長 山田洋次



北アルプスを仰ぎ見る安曇野館、その穏やかに傾斜した敷地のとなりに広々とした松川村営の安曇野ちひろ公園があって、その中ほどに長野電鉄から寄贈された大正末期と昭和初期に製造されたレトロな電車が二台、黒柳徹子さんの母校であるトモエ学園の電車の教室を模してデンと鎮座しています。昨年の7月、この「トットちゃん広場」オープニングの行事が華やかに行われましたが、松本善明さんをはじめ、ちひろ美術館の創立に関わる人たちは、今から40年前にちひろの住宅の一隅にスタートした時のささやかであっただろう開館式を想起して、さぞ感慨無量だったことでしょう。

高名な画家やコレクターの名前を冠した美術館は数多くありますが、私たちの 美術館は大事に保管されていたいわさきちひろのほとんど全部である1万枚近く の絵本原画を元にしてスタートし、家族連れでのんびり過ごせる居心地の良い空 間であり、アットホームで人間的なサイズであることをコンセプトとして今日に いたっています。しかも世界中の優れた絵本作家の原画コレクションが充実して いて童画の収蔵では世界のトップレベルであることは、ささやかな自慢です。

私たちの美術館のもうひとつの特徴は、ひたすら赤ん坊や幼い子どもを描き続けたちひろが生涯をかけて念じ続けたこと――かよわい子どもたちが安心して生きていける世の中であってほしい、そのひとりひとりの個性の成長が大事に守られなければならない、そのためには、何よりもまず世界が平和でなくてはならない、戦争は絶対に許さない――というテーマを、経営の方針として大切にしているということだと思います。

美術館の冬の時代にあって、われわれの小さな美術館も決して安定経営とは言えないけど、とも角、安曇野館の新設や東京館の新築を成し遂げ、子どもの絵本 美術館として世界に知られるようにまでなったのは、ひとえに私たちの仕事に賛成し惜しみなく応援して下さった観客の皆さんのおかげです。

40周年にあたり、改めてお礼申し上げます。



ちひろさんの心を大切に

ちひろ美術館(東京・安曇野)館長、ユニセフ親善大使 黒柳徹子

ちひろさんが亡くなって3年目に誕生した「ちひろ美術館・東京」が開館40年を、「安曇野ちひろ美術館」が開館20年を迎えました。40年も経っているのに、美術館を愛してくださって、いろいろなところからおおぜいの方が来てくださり、ちひろさんの絵が好きだといってくださる。本当にありがたいことだと思っています。おじいちゃまおばあちゃま、お父さんお母さん、そして大人になったお子さんたちが、そのお子さんまでつれて、4世代でご来館くださるかたもいらっしゃいます。素敵なことだと思います。

40年間で世の中はずいぶん変わってきました。子どもたちは機械を見て育っています。日本の子どもたちは豊かではあっても、本当に幸せなのか、と危ぶむ声が出てきています。いつも、子どもの幸せを願っていたちひろさんにとって、きっと心を痛めるだろうと思えることもいっぱい起こっています。

子どもの、真っ白な画用紙のような心に何を与えるかは、大人にかかっています。 初めて目に入ってくるものは、美しいものであってほしい。ザラザラしていない もの。繊細でやさしいちひろさんの絵を見てもらって、心やさしい気持ちの子ど もに育ってほしい。

私が子ども時代、トモエ学園で過ごしていた頃は戦争のなかでした。同じ時代に、ちひろさんは青春時代を過ごしていらっしゃいました。ちひろさんの絵のなかには、かわいい子どもたちを決して泣かさないよう、「平和」をずっと続けてほしいという願いがこめられています。世の中が絶対に戦争に巻き込まれるようなことにならないように、子どもたちが未来を夢見て、そして安心して生きていける世の中であってほしい。

今も世界には戦火や貧困にさらされている子ども、豊かさのなかに暮らしながら暴力にさらされている子どもがたくさんいます。こんな時代だからこそ、ちひろさんや世界中の絵本画家が描いた「やさしさ」「美しさ」を伝えていきたい。

これからもみんなでがんばりますので、この美術館がずーっと続けていかれま すように。みなさま、どうぞ、よろしくお願いいたします。





ちひろ美術館の使命 開館40年にあたって

ちひろ美術館常任顧問 松本 猛



ちひろ美術館は 1977 年、二つの理念を掲げて活動を始めました。一つは「子どもの幸せと平和」。もう一つは「絵本文化の発展」です。

この 40 年の間に、世界経済は発展し、科学技術は長足の進歩を遂げました。コンピューターとインターネットの普及は人間社会を効率よく便利なものに変えたように見えます。しかし、それは本当に子どものしあわせにつながる文明の発達だったのでしょうか? 2011 年には東日本大震災が起こり、福島の原発事故が発生しました。これは、効率化と経済最優先の現代社会への警鐘だったといえるのではないでしょうか。

いわさきちひろは、経済成長の代償に、人間は心の豊かさを失うのではないかと 危惧し、自分は、今の日本から失われたいろいろなやさしさや美しさを描く、と語っ ています。ちひろ美術館は、ちひろの意思を引継いで子どもの幸せにつながる豊 かさとは何かを探り、発信し続ける必要があります。

平和についても、世の中は前進しているのでしょうか? 2003年のイラク戦争後、テロはなくなるどころか多発し、不安な世界情勢が続いています。その根底には世界の経済格差が潜んでいます。しかし、各国の動きを見ると格差を容認する保護主義や極右勢力が力を伸ばしています。日本でも立憲主義が危機にさらされています。

絵本は美術という世界共通言語を通してさまざまな国や地域の文化を表現し、子どもから大人までが享受できる世界です。子どもたちが世界の多様な文化に関心を持ち、尊重するようになれば、ひいては国際交流、国際平和にもつながるといえるでしょう。ちひろ美術館の世界の絵本原画コレクションは、そういう思いも込めて作品を収集し、公開しています。

絵本文化についていえば、この 40 年で大きな変化がありました。ちひろ美術館が開館した当初は、絵本を美術と認識している人はほんのわずかでしたが、今では 40 近い絵本専門美術館ができ、公立美術館での絵本展も盛んになりました。この動きは世界にも波及しつつあります。20 年前には絵本学会も設立され、絵本の多様な側面の研究も進んでいます。こうした絵本を取り巻く動きの中心の一つにちひろ美術館の存在があったことは誇りにしたいと思います。

急激な文明の発達のなかで私たちはいま、立ち止まって、人間が自然の一部であることを自覚し、多様な文化を持つ国や地域が互いに尊重しあい、共存する道を探らなければならない時代に生きています。絵本は、子どもたちがものを考え、感じ、さまざまな文化を認識するための大切な世界です。ちひろ美術館の使命は、この絵本文化を守り、発展させていくことにあるでしょう。

サンドイッチの味と絵描きの命

(公財)いわさきちひろ記念事業団評議員 松本善明

ちひろ美術館が今年 40 周年を迎える――。ということは、ちひろが亡くなってから、もう 43 年もの歳月が流れたということです。僕は未だに、そのことを実感できていないように思います。今も、ちひろが生きている気がする。

僕の暮らすシニアハウスでは、風呂場の脱衣所にちひろのカレンダーが掛けられています。だから、風呂のたびにちひろの絵を見る。そうすると、そのたびにちひろに会ったような気がする。そして、あれ、この人ほんとうに死んだんだっけ、といろいろなことを思い出すんです。

生前のちひろは、いつも絵を描いていました。子どもの頃は、道に次々と蝋石で絵を描いていくから、蝋石の絵を追っていけばちひろの居場所がわかる、そんな子だったそうです。結婚してからも、描いていないのはトイレと食事のときくらいか、というほど、絵ばかり描いていました。出かけるときも常にスケッチブックを携えていて、電車の中でも誰かを描いていました。向こうがそれに気づくと、ちょっと頭を下げて……そんな姿も懐かしく思い出されます。

けれどもじつは、何よりも忘れがたいのは、ちひろのサンドイッチの味かもしれません。大学を卒業した年の夏頃、神田の共産党支部の会議で、僕はおかっぱ頭のひとりの女性に出会った。それがちひろでした。「絵描きです」と名乗る彼女がどんな絵を描くのか知りたくて、ある日、ちひろの家を訪れたのですが、そのとき、彼女がサンドイッチを出してくれたんです。ちょっと辛子が効いていて、なんとも言えず美味しかった。戦後間もなく、まだ食べ物もあまりない時代のことで、独りものの僕は、外食券食堂でちょっと食べるのがせいぜい、という暮らしです。それからも「絵を見せてください」といって、ちひろの家に行っては、サンドイッチをごちそうになりました。

それからしばらくして、僕たちは結婚しましたが、あんなに早く逝ってしまうとは思ってもいませんでした。55年の人生であれだけの作品を残したちひろです。もしも長生きしていたら、きっと世界的な巨匠になっていたに違いないと思います。ちひろ亡き後、僕はいろんな国を訪ねてたくさんの絵を見る機会にも恵まれましたが、彼女の絵ほど、希望を感じさせる絵はありません。ちひろの絵は夢でいっぱいなんです。戦争反対を声高に叫ぶわけではないけれど、ちひろの絵を見ていれば、戦争にはつながらない。人間第一なんです。人間が豊かに、戦禍なんかに巻き込まれないで生きることの大切さを、ちひろは絵で語っている、そしてこれからも語り続けていくんだと思います。

絵が生きているから、ちひろは死なない。風呂場でちひろの絵を見ては、絵描 きの命は長いものだと、しみじみ感じています。



ちひろ美術館40年によせて

作家 中島京子



© 文藝春科

初めて訪ねたのは、大学生のころで、それでも30年以上前のことになります。いつ伺っても、ふんわりとやさしい気持ちになる特別の空間です。

わたし自身、多くの方と同じように、ちひろ 絵本に囲まれた幸福な子ども時代を送りました。 『おにたのぼうし』『おふろでちゃぷちゃぷ』『ゆ きのひのたんじょうび』『赤い蝋燭と人魚』な ど、数々の名作絵本が脳裏に浮かびます。敗 戦後の焦土の日本を立て直して一息つき、人々 の暮らしに余裕が生まれて少しずつ文化の大 切さが浸透していくころ。ちひろ絵本が次々に 子どもたちに読まれていった60年代から70年 代というのは、そうした時代でもあったと思います。また、ちひろ自身も作品を通してそうしたように、市民が反戦の声を上げるような運動も、広く支持されていたと思います。ちひろ美術館の「ちひろのアトリエ」コーナーを訪ねると、その洗練されて教養の豊かさの感じられる空間に、あのころの空気を感じ、懐かしさといとおしさを覚えます。

20年になるという安曇野の美術館は、じつはまだ訪ねていないのです。夏休みに遊びに来る、絵を描くのが大好きな姪甥といっしょに、ぜひ行ってみたいと考えています。

人間が自然体になれる、ちひろの絵

平塚市美術館館長 草薙奈津子



岩崎ちひろの原稿を依頼された時には驚きました。というのはそれまで私は絵本とは全く無関係だと思っていたからです。私の専門は近代・現代日本画であり、大観や御舟や土牛などです。はたしてきちんとした原稿を書けるかしらと、ドキドキしながらお引き受けしたことを今でもよく覚えています。

あわてて一生懸命勉強しました。そしてちひろがたらし込み(宗達に始まるとされる琳派の没骨描法)を使っていることに気づき、俄然ちひろの画家としての態度に興味と関心を抱くようになりました。柔らかい色調も魅力ですし、描かれている子供たちも本当に可愛い。よく見、そして創って描いていると思いました。

私の母はちひろが大好きで、美術館から頂

いたカレンダーを持って行ってあげると、とても喜んでいました。亡くなった時ベッドの横にポツンと掛かっていたちひろカレンダーに言いしれぬ寂寥を感じました。そしてどうして日本人はこんなにちひろ作品が好きなんだろうと思いました。

赤ちゃんを見ると誰でもが可愛いと思うのではないでしょうか。私もそうです。そしてかわいいということに理由も理屈もありません。ちひろ作品もそうです。私などつい美術史的に考えてしまうのですが、ちひろ作品だと、もっと素直に、自然に接することができるのです。人間が自然体になれる、それがちひろ芸術が多くの人々に愛される所以ではないかと思っています。

「物語」が失われても

ライター・エディター、永青文庫副館長 橋本麻里

曲がりなりにも美術の周辺で書くことを生業にしている筆者が、ただただ絵の美しさに惹きつけられた初めての対象は、いわさきちひろの絵本であった。そのことをはっきりと思い出したのは2012年、『芸術新潮』のいわさきちひろ特集に編集・執筆で関わった時だ。『あかいくつ』『にんぎょひめ』など、かつてこども部屋の本棚にあった懐かしい絵本に再会し、「色褪せぬ」という言葉がこれほどふさわしい作品はなく、なるほど、芸術誌で取り上げるにふさわしい画家だったのだ、と認識を新たにした。

そしていま、不思議にも、面白くも思うの

は、伊藤若冲であれ刀剣であれ、今日の美術における流行が、作品そのものの質以外に、作家や作品にまつわる物語性に左右されるという「物語消費」 マーケティング用語を当てはめることには抵抗もあるが の傾向があるにもかかわらず、それこそ物語に寄り添って描かれたちひろの挿画が、本体である物語とも、ちひろ自身のドラマティックな人生ともまったく独立に評価され、長く愛され続けてきたことだ。いつか物語が失われ、作家自身も忘れ去られ、依るべき一切のものが消え失せたとしても、その絵は残るだろう。そしてそのような確信を与えてくれる画家は、決して多くはない。



『窓ぎわのトットちゃん』タイ語版から33年

翻訳家・通訳プッサディー・ナワウィチット

ちひろ美術館・東京の開館 40 周年及び安曇野ちひろ美術館の開館 20 周年、おめでとうございます。

私は1968年から1978年まで日本に留学しました。一年間の日本語教育を受け、1969年から1975年までお茶の水女子大学家政学部(今は生活科学部と改名されましたが)児童学科に在籍しました。その間、日本や西洋の児童文学作品に触れることが出来ました。日本で出版された絵本や児童書を手にする度、日本の子供たちが羨ましく思いました。

帰国してからNHKテレビの仕事や国際交流 基金の仕事をしながら今のバタフライ出版社の お手伝いをすることになりました。当時の編集 長がある日バンコクの日本の本屋で『窓ぎわの トットちゃん』の英語版を見つけました。イギ リスで教育を受けた編集長は翻訳したいと言っていましたが、その話を国際交流基金のお仕事で知り合ったグラフィックデザイナーの柴崎さんにしたところ英語ではなく日本語から翻訳した方が良いのではないかとアドバイスしてくれました。柴崎さんが写真家の田沼先生を紹介して下さったので黒柳さんに会い、『窓ぎわのトットちゃん』のタイ語版を出すことが出来ました。

その出会いから33年が経ちました。子どものころにタイ語で読んだ人たちは今親になってもトットちゃんの物語といわさきちひろさんが描いた愛らしいトットちゃんたちが大好きだと言っています。タイ人のちひろファンにとって、いわさきちひろさんは無邪気で可愛らしい「子どもの美」と夢の世界のような「水彩画の美」をこの世に残してくれた遺産だと言えるでしょう。

